

『風葉集』にみえる斎王関係和歌

所 京 子

The Collection and Explanation of the
Japanese Odes (WAKA) about Imperial Prin-
cesses Devoted to the Ise Shrine (SAIKŪ)
and Kano Shrine (SAIIN) in FUYŌ-SYŪ.

Kyoko Tokoro

はじめに

鎌倉時代文永八年（一二七二）十月成立の『風葉和歌集』は、わが国最初の物語歌撰集である。撰者は未詳であるが、藤原為家が有力で、後嵯峨天皇の皇后、後深草・龜山両天皇の生母大宮院姞子^{（西園寺実氏女）}の下命により、為家の孫にあたる為子ら大宮院の女房たちがその事業の中心をなしたという^①。

『風葉和歌集』の巻頭には『古今和歌集』の仮名序を模した序があり、本来は二十巻で、末巻二巻は早く散逸したらしい。本文は春上・下・夏・秋上下・冬・神祇釈教・離別羈旅・哀傷・賀・恋一・五・雜一・三の十八巻から成り、二〇〇に及ぶ物語から秀歌一四一八首が詞書・作者名を付して収められている。

この物語歌撰集に抄出された歌で、最も多いのは『源氏物語』の一

八〇首、『宇津保物語』の二一〇首、『狭衣物語』の四十五首、『みかきかる』の四十一首などであるが、現在伝わらない散逸物語も多く含んでおり、平安鎌倉時代の物語研究にも貴重な資料であるといえる。

私は先に『斎王和歌文学の史的研究』^{（国書刊行会、平成元年刊）}を上梓し、その拙著において斎王関係の歌の集成および考証を行った。しかし、その際は実在の人物の斎王関係の歌についてが主であったので、おのずと作り物語における斎王関係の歌には触れなかった。そこで本稿は、その補遺として『風葉和歌集』にみえる諸物語所載の斎王関係の歌を取りあげ、これに若干の解説を加えようとするものである。

以下、一において関係の歌を掲げ、二において簡単な解説を行いたいと思う。

なお本稿作成には、小木喬氏著『散逸物語の研究 平安・鎌倉時代編』^{（笠間書院、昭和48年、以下A書と呼ぶ）}および樋口芳麻呂氏著『平安・鎌倉時代散逸物語の研究』^{（ひたく書房、昭和57年、以下B書と呼ぶ）}を大いに参考にさせて頂いた。また、テキストは樋口芳麻呂氏校注『王朝物語秀歌選』^{（岩波文庫本上・下、昭和62年・平成元年、以下C書と呼ぶ）}によった。ここに併記し、その学恩に感謝する次第である。

一 和歌集成

六条御息所、斎宮に具しきこえて下り侍りける日、霧いたう降

りてただならぬ朝ぼらけに、独りごたせ給ひける

六条院御歌

1 行く方をながめやらんこの秋は 逢坂山を霧な隔てそ

(以下C書、巻第五秋下、311番)

六条御息所、娘の齋宮に具して下らむとし侍りけるに、長月の初めつ方立ち寄せ給へるに、明け行く空の気色ことさらに作り出でたらんやうなりければ

六条院御歌

2 暁の別れはいつも露けきを こは世に知らぬ秋の空かな
御返し

3 大方の秋の別れも悲しきに 鳴くねな添へそ野辺の松虫

(巻第十五恋五、1121・1122)

所 左大将、かたちを隠して所々見歩きけるころ、前齋宮に大弐まさかぬが近づき寄りけるを、太神宮を思はせてさまざま申しけるに、恐れ怠り申して出でにければ、よみ給ひける

隠れ蓑の前齋宮

4 我がために天照る神のなかりせば 憂くてぞ闇になほまどはまし

(巻第七神祇、457)

伊勢より上り給ひて後、手習ひに

隠れ蓑の前齋宮

5 かくてふるかひこそなけれ鈴鹿川 八十瀬の波のなにかへりけむ

(巻第十八雜三、1356)

齋宮関越え給ひぬときこしめしてよませ給ひける

独り言のみかどの御歌

6 別れてふ黄楊つげの小櫛くしもさしてしを また関越ゆと聞くぞ悲しき

(巻第八離別、556)

母添ひて伊勢に下るべきにて侍りけるに、わづらふことありてとまりにければ、近江あふみ立ち給ふ日遣はしける。

独り言の齋宮女御

7 あふみてふ名を頼めども独り今日 立つはかひなし滋賀の浦波
返し 按察大納言女

8 もろともに立たましものをよそにのみ 聞くぞ悲しき滋賀の浦波

(巻第八四羈旅、574・575)

六条院、須磨に移ろひ給はんとて、故院の御墓に詣で給ひける御供にさぶらひて、賀茂しもの下しもの御社をかれと見渡すほど、齋院の御禊に飯の御隨身にて仕うまつれりしこと思ひ出でられて、下りて御馬の口を取りて聞こえける

源氏の衛門大夫

9 引き連れて葵かざししそのかみを 思へばつらし賀茂の瑞垣

(巻第七神祇、464)

朝顔の齋院下り給ひて後も、同じさまに動きなきけしきに侍りければ

六条院の御歌

10 つれなさを昔にこりぬ心こそ 人のつらさに添へてつらけれ

(巻第十二恋二、842)

古里の花おぼし出でて、一条院の中宮に櫛に付けてきこえ待りける

狭衣の斎院

11 時知らぬ櫛の枝に折りかへて よそにも花を思ひやるかな

(巻第二春下、84)

祭の日、近衛づかさの斎院に参るをうらやましく見送らせ給ひてよませ給ひける

狭衣の帝の御歌

12 引き連れて今日はかざしし葵草 思ひもかけぬしめのほかな

(巻第三夏、146)

内より、「涙に曇る月影は宿とめてもやぬるる顔なる」、いかやうにてか、ただ今は御覧ずらんなどきこえさせ給へる御返し

狭衣の斎院

13 あはれ添ふ秋の月影袖ならで 大方にのみながめやはする

(巻第四秋上、276)

参るべきよし聞こえける人に、雪いたく積もりて、えもいはずしみ氷りたる呉竹の枝につけてたまはせける

狭衣の後一条院御歌

14 頼めつつ幾世経ぬらん竹の葉に、降る白雪の消え返りつつ

御返し

15 末の世も何頼むらん竹の葉に かかれる雪の消えも果てなで

(巻第六冬、435・436)

16 神代より標引きはへし櫛葉を 我よりほかにたれか折るべき
これは、狭衣の源氏の宮、内へ奉らんとし給ひけるに、堀川院の御夢に、賀茂よりとて侍りけるとなむ。

(巻第七神祇、448)

みかど、ただ人におはしける時、祭の日、御社にて、都には音なきほととぎす、御垣のわたりには声慣れにけるを聞かせ給ひて、「賀茂の岩垣尋ね来にけり」とのたまはせけるに

狭衣の斎院の女別当

17 語らば神も聞きてむほととぎす 思はむ限り声な惜しみそ

(巻第七神祇、463)

神無月の十日ごろ、平野に行幸侍りけるに、斎院のわたりの紅葉いみじう盛りに御覧じ渡させ給ひて

狭衣のみかどの御歌

18 神垣は杉の梢にあらねども 紅葉の色もしく見えけり

(巻第七神祇、468)

斎院のみそぎの日、祓へ仕うまつるを聞かせ給ひて、いと神々しく物恐ろしうおぼされて

狭衣のみかどの御歌

19 みそぎする八百万代の神も聞け もとよりたれか思ひそめてし

ただ人におはしましける時、御出家おぼしめたたせ給ひける

を、賀茂の大明神、堀川院に告げ聞こえ給ふことありて、御本意も遂げさせ給はで、御社にてさまざま御祈り侍りけるを聞かせ給ひて、御心のうちに

20 神もなほもとの心をかへりみよ この世とのみは思はざらなむ

(巻第七神祇、480・481)

斎院に、雪にて富士の山作られて侍りけるを御覧じて

狭衣のみかどの御歌

21 燃えわたる我が身ぞ富士の山よただ 雪積もれども煙立ちつつ

(巻第十一恋一・805)

賀茂の行幸に上の御社に御祓つかうまつるとて、さまざま祈りたてまつるを聞かせ給ひても、そのかみの御心のうちはみな違ひておぼしめされければ

狭衣のみかどの御歌

22 八島守る神も聞きけむ逢ひも見ぬ 恋ひまされてふ禊やはせし

(巻第十二恋二、839)

山吹を折りて、斎院に見せきこえさせ給ふとて、くちなしにしも咲きそめけん契りこそとのたまはせて

狭衣のみかどの御歌

23 いかにせん言はぬ色なる花なれば 心のうちを知る人ぞなき

(巻第十一変五、1065)

南殿の桜の盛りに、春宮・二のみこななど、花折りてとのたまは

せけるに、奉り侍りけるを、帝、吹き寄る風も恨めしきに情なしや、とのたまはせければ、奉し侍りける 御手洗川の内大臣行方なき風だに散らす花なれば 君がためには手折らざらめや

(巻第二春下、78)

25 人知れず我が標刺しし榊葉を 折らんといかで思ひ寄るらん

これは御手洗川の内大臣、斎院のいまだ父みかどにも知られきこえ給はざりけるころ、ほのかに見きこえて、心にかかりて寝たる夜、賀茂よりとて、榊に付けたる文に書かれたりけるとな

(巻第七神祇、449)

賀茂のいつきいまだに変わり侍らざりける時、花の盛りに内大臣詣でて、「散らでも花の千代を経よかし」と申し侍りければ

御手洗川の斎院の中納言

26 榊葉も花の匂ひもたぐひなき 折る人からに千代も経ぬべし

(巻第七神祇、462)

27 影並べすまむことこそ難からめ 入り方近き山の端の月
これも石山の観音、御手洗川の内大臣の夢に告げ給ひけるとな

(巻第七神祇、484)

賀茂のいつきおり給ひてのち、みかど御対面ありけるに、月さし出でてをかしきほどなりければ

御垣が原の一品の宮

28 こよひこそ君が光をさし添へて 神代も知らぬ月はすみけれ

29 皇后宮、内に入らせ給ひて、出でさせ給ひけるに 同じ中宮
もろともに影を並べぬ雲の上は すむ空もなし秋の夜の月

(巻第四秋上、278・279)

兵部卿のみこのむすめ、内に参るべしと聞こえける、にはかに
賀茂のいつきに定まりにければ、をみなへしにつけ遣はさせ給
ひける

御垣が原のみかどの御歌

30 神垣に咲き交るともをみなへし 露ばかりをば思ひ忘るな

御返し

齋院

31 木綿^{ゆふだすき}褌^{ふんどし}かけても人の忘れずは 露の情を頼みこそせめ

(巻第七神祇、466・467)

前齋院の忌みにこもりて侍りけるに、皇后宮のとぶらひのたま
はざりければ聞こえさせ侍りける

言はで忍ぶの関白

32 とまる身の憂きにつけてや亡き人の あはれをだにも問はれざる
らん

(巻第九哀傷、684)

人の忌みにこもりて侍りけるに、ありしなからのさまにて夢に

見え侍りければ、うちおどろきて

言はで忍ぶの関白

33 えぞ知らぬ見つるや現^{うつ}これや夢 まだ明けぬ夜の心まどひに

(巻第九哀傷、688)

女一の宮、齋院にゐ給へるも、母は知らずやあらんとおぼされ
てよませ給ひける

秋の夜長しとわぶるみかどの御歌

34 木綿^{ゆふだ}かけて知らずやあるらん思ふ人 神の齋垣^{いがき}に標^{しめ}給ひつとも

賀茂の御告げにて、みかどに知られたてまつり給ひて、「榊葉の
さして教ふる人なくば」とのたまはせたる御返し

同じ齋院の母后の宮

35 変るなと榊葉^{さかき}さして祈り来し こやそのかみのしるしなるならん

(巻第七神祇、459・460)

みかど思はし忘れたるにやとおぼえ給ひけるころ

36 いつのまに契りしことは忘れ草 茂れる仲となしはてつらん
秋の夜長しとわぶるの齋院の母后

(巻第十四恋四、1018)

前齋院に、山吹のえならぬ枝につけて聞こえ侍りける

ふくら雀の左大臣

37 くちなしのこはえもいはぬ色なれど さてしもいか山吹の花

(巻第二春下、120)

祭の日、前の齋院に聞こえ侍りける

忍ぶ草の中納言

38 今までよそにやは見んもろは草 そのかみ山に慣れしかざしを

返し

39 もろかづらしめのほかにはなりながら おなじかざしを我やかく

べき

(巻第三夏、148・149)

嵯峨の院かくれさせ給へりけるころ、祭りの日、ひととせ使して侍りしを思ひ出でて、かの古き院に聞こえ侍りける

かやが下折れの按察の典侍

40 ありし世の今日のみあれを思ひ出でて 神の齋垣もあはれ知るら

ん

(巻第九哀傷、67)

子 京 所

六条院の御忌み果てて、東宮、内へ入らせ給ひて、「残る木の葉を思ひこそやれ」とのたまはせたる御返し

草鶴の前齋院

41 思へただ梢に残る木の葉さへ 散り乱れゆく心細さを

(巻第九哀傷、647)

前齋院に聞こえ侍りける

初音の入道太政大臣

42 榊葉のさしてつれなき世々を経て 神も許せるしめのほかな

(巻第十二変二、841)

四季物語の中に

43 心にはなほかりけりもろかづら 思ひ絶えにしあふひなれども

御返し

葵の齋院

44 言の葉にかけても何か思ひ出づる いつきの森のしめの下草

(巻第十一恋五、1067・1068)

二 和歌考証

以上、四十四首の齋王関係の和歌を拾い出すことができた。その内訳

〈A表〉

齋院関係	齋宮関係	物語名	和歌数	本稿和歌番号
源氏物語 狭衣物語 御手洗川 御垣が原 言はで忍ぶ 秋の夜長し ふくら草 忍ぶ草 かやが下折れ 葦鶴 初音 四季物語	源氏物語 隠れ蓑 独り言		3 2 3	1 3 3 4 5 6 8
2 1 1 1 2 1 3 2 4 4 13 2				9 10 11 23 22 27 28 31 32 33 34 36 37 39 38 40 41 42 43 44

は、伊勢齋宮関係の和歌が八首、賀茂齋院関係の和歌が三十六首で、齋院の方が断然多い。また、それを物語別にみるとA表のごとくである。

すなわち、これによると『風葉和歌集』の二〇〇種の作り物語中十四種の物語に關係和歌がみられる。以下齋宮・齋院と順次みていきたい。

まず、1-3は『源氏物語』（賢木の巻）の歌であり、1・2は六条院の御歌、3は六条御息所の歌である。長月（九月）に六条御息所が娘の齋宮に具して伊勢下向を果そうとされた時、六条院（光源氏）が詠じたものと、それに対して御息所が返歌したものである。伊勢群行をとげる日の明方に霧が多く降り一通りでなく心にしみたので、御息所と娘の齋宮が行く方をながめていよう、秋霧よ、逢坂山を隔てないでおくれと、独りつぶやいた歌である。

もちろん、このモデルは朱雀天朝の齋宮徽子女王、円融天朝の齋宮規子内親王母娘である。これについては、多くの先学がその史実性との関連を述べておられるし、私も以前に、小論を試みている^②。詳細はそれに譲るが、規子内親王の初齋院入御がおくれたこと、群行の日時や母の前齋宮（徽子女王）同行のことなどが準據となった。

『源氏物語』（日本古典文学大系本、賢木の巻）に「齋宮の御下り、近うなり行（く）まゝに、御息所、もの心ほそく思ほす。^{（略中）}よろづのあはれを、思しすてゝ、ひたみちに、いで立ち給ふ。親、添ひて下り給ふ例も、殊になけれど、^{（略中）}やうく、明け行（く）空の気色、ことさらに、作り出でたらむ様なり。」として2の「暁月の別れは……」の歌がつづいている。そして「風、いと、ひややかに吹きて、松蟲の鳴きからしたる聲も、折知り顔なるを、さして、思ふ事なきにだに、聞（き）過ぐしがたげなるに、まして、わりなき御心惑ひどもに、中く、こともゆかぬにや。」のあとに3の「大方の秋の……」がきている。

同じく『源氏物語』（同上）には、齋宮群行の日暗くなってから出立する御息所へ源氏がおくった「振りすてゝ今日は行（く）とも鈴鹿川八十瀬の波に袖はぬれじや」に対して「いと暗う、物さわがしき程なれば、又の日、せきのあなたよりぞ、御返しある。」として「鈴鹿川八十瀬の浪にぬれくず伊勢までたれか思ひおこせむ」という御息所の旅先からの返歌がとどく。『源氏物語』はつづけて「霧いたう降りて、たゞならぬ朝ぼらけに、うちながめて、ひとりごちおはす。」として1の歌をよむ。御息所と齋宮の向った伊勢の方角をながめながら、この秋は逢坂山を霧よ隔てないでおくれと、詠んだのである。源氏のさびしさもさることながら、住みなれた京をはなれていく旅の空の御息所の心情をあますことなく描いている感動的な場面である。この「賢木の巻」の初めの部分の齋宮関係と歌三首（1-3）を『風葉和歌集』は収めているのである。

4と5は『隠れ蓑』という散逸物語中の齋宮関係の和歌二首である。この物語の成立は『源氏物語』以前とされており、内容は隠れ蓑に身をかくした男が、いろいろの所を見歩いた話、そしてさまざまな普通ではできないようなことをした話を主とした物語であるという（A書318・319頁）。

4の詞書および歌によると、この隠れ蓑に身をかくした主人公は、前齋宮が「大式まさかぬ」という男に言い寄られてあやういところを伊勢の大神宮の御ことばと思わせていろいろ叱責したので、大式はそれをおそれて謝罪し、前齋宮をその危難から救うことができたというものである。したがって4の歌意も「もしも私のために天照大神がおられなかったら情ない状態で闇の中にまだ迷っていたことでしょう」（C書（上）、383頁）となる。この下の句「憂くてぞ闇になほまどはま

し」には、『古今和歌集』、『伊勢物語』の在原業平の歌「かきくらす心の闇に迷ひにき……」の影響もみられなくもない。あるいは、恬子内親王と業平の話や、稚子内親王と師輔および敦忠などの恋愛譚なども意識的に題材とされていたのではなからうか。

また5の歌は、この前斎宮が伊勢から帰京し、心のまゝに思いうかぶ歌を書いたというが、下句の「鈴鹿川八十瀬の波の……」という表現から『源氏物語』（賢木の巻）の斎宮群行の日の光源氏と六条御息所兩人の歌、「振りすてゝ今日は行くとも鈴鹿川八十瀬の波に袖はぬれじや」（傍点引用者）や（鈴鹿川八十瀬の浪にぬれ／＼伊勢までたれか思ひおこせむ」（同上）に影響を与えているかともいわれている（C書（下）、303頁）。

なお、『風葉和歌集』には、『隠れ蓑』の和歌十一首が選ばれているが、そのうち二首が斎宮関係の和歌である。

6・7・8は、散逸物語の一つ『独り言』の和歌である。『風葉和歌集』には、その秀歌五首が収められているが、そのうち斎宮関係の和歌が三首もある。

この『ひとりごと』の題名の由来は、はっきりしないが、この物語の構想が『源氏物語』（賢木の巻）以降の朱雀院と秋好中宮の關係に基づくことが指摘されている。事実、この6・7・8の歌と詞書をみるとこの帝は、あたかも『源氏物語』における朱雀帝そのまゝである（A書741頁）。六条御息所の女である斎宮に「別れの御櫛」をつける場面「斎宮は十四にぞなり給ひける。いとうつくしうおはすさまを、うるはしうしたて奉り給へるぞ、いとゆゆしきまで見え給ふを、帝、御心動きて、別れの御櫛奉り給ふ程、いとあはれにて、しほたれさせ給ひぬ。」がそれである。先にも掲げた六条御息所が逢坂関あたりから源氏によ

こした返歌「鈴鹿川八十瀬の波にぬれぬれず伊勢まで誰か思ひおこせむ」につづく文に「霧いたう降りて、ただならぬ朝ぼらけに、うちながめて、ひとりごとおはす。」とあることから、小木氏は、「この物語では、帝が斎宮を思いやって「ひとりごとおはし」たのではあるまいか。」（A書、744頁）とされている。そうであるかもしれない。7の詞書および8の歌によると母が添って伊勢に下るべきはずであったが、病氣となって独り今日立つことになったのがさびしく悲しいといっている。しかし、「母添ひて伊勢に下る」ということが例がなかっただけに、史実でも円融帝はおゆるしにならなかった。それをあえて断行したのは徽子・親子母娘がはじめてであった。この『ひとりごと』でも7の歌に「斎宮女御」とみえ、この斎宮がのち入内されていることがわかるのである。

たゞし、小木氏は「この斎宮は御代半ばにして退下し、女御となったものと考えられる。」「史実に同じ帝の女御になった斎宮があるかもしれない。」（A書742頁）と述べておられるが、史実の徽子女王は御代半で母寛子の死により退下されるが、入内は次代村上天皇のときであった。斎宮が同じ帝の後宮に入られた例は寡聞にして知らない。たゞ近い例として入内もしくは降嫁された方は次のごとくである。（なお人物の「」は恋愛關係などにあったと思われるもの。）

〈斎宮〉

清和天皇朝

恬子内朝王（文徳皇女
母紀静子） ↓〔在原業平〕

朱雀天皇朝

雅子内親王（醍醐皇女
母源周子） ↓〔藤原敦忠〕
藤原師輔（室）

徽子女王（重明親王女
母藤原寛子） ↓村上天皇（女御）

花山天皇朝

済子女王(章明親王女
母藤原敦敏女) ↓〔平致光〕

三条天皇朝

当子内親王(三条皇女
母藤原娥子) ↓〔藤原道雅〕

後一条天皇朝

埴子女王(具平親王女
母為平親王女) ↓藤原教通室

〔斎院〕

陽成・光孝天皇朝

穆子内親王(光孝皇女
母滋野直子か) ↓醍醐天皇？

冷泉・円融天皇朝

尊子内親王(冷泉皇女
母藤原懷子) ↓円融天皇(女御)

後一条天皇朝

馨子内親王(後一条皇女
母藤原威子) ↓後三条天皇(皇后)

後朱雀天皇朝

娟子内親王(後朱雀皇女
母植子内親王) ↓源俊房(妻)

白河天皇朝

篤子内親王(後三条皇女
母藤原茂子) ↓堀河天皇(中宮)

以上の詳細については拙著『斎王和歌文学の史的研究』第二部及び第四部を参照されたい。

9・10は、それぞれ『源氏物語』の須磨の巻と朝顔の巻の歌である。

9は、その歌と詞書によれば、源氏が須磨流謫のさいに、亡き父帝(桐壺院)の山陵に詣うでたが、そのお伴をしていた衛門大夫は、賀茂の下をみて以前人々と連れだって葵をかざして斎院御禊に出かけた日のことを思い、賀茂の神が源氏を守って下らないことを恨めしく思うと詠じている。

また10は、朝顔の斎院(桃園式部卿の姫君で、朱雀帝の御代の斎院)が父宮の死により退下されたので、斎院を想う源氏への心寄せがあるかと思つたが、一向に揺ぎそうもないと詠った源氏の歌である。『源氏物語』の斎院関係と歌はこの二首である。なお、9の歌は『物語二百番歌合』(「百番歌合」八十七番左、C書(上)、81頁)にもみえる。

次の11～23までは『狭衣物語』にみえる斎院関係と歌である。私はかつて『狭衣物語』にみえる斎院記事の史的考察^{〔3〕}において、この作り物語の作者とされている六条斎院宣旨が、歴代斎院の事績——とりわけ大斎院選子内親王、馨子内親王、令子内親王などの事績を参考に、さらに自らの斎院奉仕の状況や生活体験を存分に活用して物語の構成に役立てていることを述べた。

天喜三年(一〇五五)五月に斎院内で行われた物語合には、十八の作り物語の名がみえている。とくに、この中にみえる小式部の作の「逢坂越えぬ権中納言」が『堤中納言物語』に入っていたことから、これらの物語が当時実際に存在していたことが確認された。その歌合で六条斎院宣旨は「玉藻に遊ぶ権大納言」という作品をつくっている。

11は、斎院となった源氏の宮が季節に色のかわらない常緑の榊の枝に折りかえて、よそながら昔住んでいた堀河院の桜を懐しく思いやっているというもの。賀茂祭に人々を連れて冠に挿した葵さえ、帝位についた今はかざすことが出来ないと祭の日、斎院内に参ることの出来る近衛使をうらやましく見送り詠んだ狭衣帝の歌。

12・13は狭衣帝より斎院(源氏の宮)への恋の歌、そして返歌。

14は、竹の葉に降る白雪が消えるように私は死にそうな思いで待っているという後一条帝の歌である。入内を期待させながら、多くの期間がすぎってしまった。15は、将来どうして頼みになりましたか、竹

の葉にかゝっている雪も消えないで凍りついていますという斎院（源氏の宮）の返歌である。

16は、詞書および歌によると、源氏の宮を入内させようとしていた堀川院の御夢に賀茂の神があらわれ、源氏の宮は斎院にするようにと託宣するのである。

17は、斎院の女別当の歌で、ほととぎすの歌になっているが、樋口氏によれば、狭衣にもっと思う存分斎院とお話になればよい、そうすれば、神もお聞きになるでしょうというもの（C書（上）、386頁）。

なお、「斎院の女別当」について樋口氏は「女官の長」と注しておられるが（同上）、この女別当の他に斎院には内侍・宣旨もあり、斎宮では、この内侍・宣旨・女別当を主要な斎宮の女官として「三所曹司」と呼称している。斎院の女官においても同様に称されていたのかもしれない。斎宮の女官については、前掲拙著第三部第一章を参照されたい。

18は、十月十日ごろ、狭衣帝が平野神社に行幸したら斎院御所の紅葉が盛んで、斎院の場所がはつきりしたという帝の歌である。斎院の御所は、紫野の七野社のあたりとされるので、平野神社に隣接している。

平野神社は、『一代要記』（改訂史籍集覧第一冊）「桓武天皇項」に「延暦十三年甲戌、（中略）今年始造平野社、見式」とあり、桓武天皇が平安奠都された延暦十三年（七九四）に創建されたことがわかる。主神の今木神など三座が祀られ、のち一座が加えられ、『延喜式』巻九、神名上に「平野祭神四座」とある。平野神とは総称でもあったという（『本朝月令』群書類従巻第八十一、公事部）。今木神の今木とは、今来（新来）の意で、百済系の人々が多数居住していた大和国高市郡

から遷都に伴い、平安遷都以前より渡来人が居た平野の地に遷されたものである。

平安時代の歌学書である藤原清輔の『袋草紙』（続群書類従、第十六輯下、和歌部）巻四にみえる「白壁のみかとおやのおほち社ひらの神の心なりけれ」に、「白壁ハ光仁天皇也。其曾祖父は舒明天皇也、是平野明神云々」とある。また桓武天皇の生母高野新笠（光仁天皇妃）の父方の祖神を祀ったものともいう。

さらに『今鏡』（すべらぎの下第三）にも「平野は、あまたの家の氏神におはすなれど」などがあり、『二十二社註式』（群書類従巻第二十二、神祇部）にも「平野 延喜式日、山城国葛野郡、平野祭神四座。第一 今木神、日本武尊、源氏氏神。……とあって、平野神社は源氏の氏神でもあったことがわかる。『日本紀略』（新訂増補国史大系）天元四年（九八一）二月二十日条に「天皇行幸平野社」。社司加藤、以二施無畏寺一為二神宮寺一」とあり、この日円融天皇の平野社行幸があった。そしてこれが平野神社行幸の始とされる（二十二社註記）。

右のような史実を踏まえて、狭衣帝は源氏の氏神である平野神社に行幸し、「源氏の宮」とのことを祈願したものと考えられるのである。

19は、斎院の御禊の日に、みそぎをする八百万代の神様もお聞き下さい。源氏の宮への私の想いは、宮が斎院として賀茂の神にお仕えする以前からのことなのですという狭衣帝の歌。

20は、未だ狭衣が帝位につく前、御出家を思いたったことがあったが、賀茂の大明神が父の堀川院にお告げになり出家の念願を遂げさせられなかった。そこで御社で様々のお祈りをなさり、お心のうちに賀茂の神も、もう一度私の源氏の宮へ対する思慕の気持をふり返って下さいと詠っている。

21は、斎院が未だ源氏の宮のころ、堀川関白邸に住んでいたが、そこで雪で富士の山を作ったのをみて、狭衣帝がよんだ歌。

22・23も斎院（源氏の宮）への恋の苦悩をうたった狭衣帝の歌である。

以上十三首が『狭衣物語』にみえる斎院関係和歌である。この狭衣帝と源氏の宮を主人公とした『狭衣物語』は、その作者宣旨が前述のごとく六条斎院祿子内親王の女房であった。そして歴史上実在の斎院の事歴を縦横に駆使して素材としたと思われる。（この点に関しては、先掲拙稿を参照）

24・25・26・27は、「御手洗川」^{みたらしがは}にみえる斎院関係四首である。「御手洗川」の歌は『風葉和歌集』に四首収められているが、そのすべてが斎院関係和歌である。

この「みたらし川」は、これら四首から考えても小木氏のいわれるごとく「内大臣が斎院に恋をしたが、ついに叶わなかったという物語であろう。」（小木氏A書802頁）もちろん「みたらし川」とは賀茂神社ゆかりのみたらし川からとったものである。

この25の詞書および歌には、

これは御手洗川の内大臣、斎院のいまだ父みかどにも知られきこえ給はざりけるころ、ほのかに見きこえて、心にかかりて寝たる夜、賀茂よりとて、櫛に付けたる文に書かれたりけるとなん

人知れず我が標刺しし櫛葉を折らんといかで思ひ寄すらんとあるが、『狭衣物語』前掲16の

神代より標引きはへし櫛葉を我よりほかにたれか折るべき

これは、狭衣の源氏の宮、内へ奉らんとし給ひけるに、堀川院の御夢に、賀茂よりとて侍りけるとなむ。

と酷似している。これについても小木氏は、「おそらく、狭衣と源氏宮との関係を模したものと思われる。賀茂の神示と言ひ、石山観音の夢告と言ひ、ことにその感が深い。」（A書八〇二頁）と述べられている。

なお、書名について樋口氏は、『古今集』恋一・よみ人知らずの「恋せじと御手洗川にせしみそぎ神は受けずもなりにけらしも」によるか（C書（上）239頁、78の注）とされているが、主人公が斎院を恋することから、小木氏がいわれているように「賀茂神社ゆかりの「みたらし川」をとったもの」（A書802頁）と単純に考えてよいかと思う。

28・29・30・31は「御垣が原」にみえる斎院関係四首である。この「御垣が原」の特色について小木氏は「登場人物がほとんど皇室の方々であるということ、主人公が帝であるということである。題名の「御垣が原」は、もちろん「ねに泣けど知る人のなき恋」を意味するものであるが、同時に右の意味で、宮城の御垣の内の方々の物語の意であろうと思う」とされている（A書778頁）。なお、樋口氏は、この書名は「物語中の和歌（777・778番）によるか」（C書（上）238頁76の注）とされている。なお、その内容中、28の歌を詠んだ一品の宮というのは、前斎院で、このみかどの中宮となるのであるが29によると、皇后宮もみえ、皇后宮・中宮と併立しているようである。又、30の兵部卿親王の姫君が前斎院（一品の宮、中宮）の後任の斎院のようである。この物語の内容についてはA書七五五―七八〇頁において詳述されているのでそれを参照されたい。ただし「内親王の中宮がおられる」ということは、村上天皇以降のある時期を連想させる。」（A書776頁）といわれているが、史実はどうなっているであろうか。

まず斎院で退下後、後宮に入られたのは次の方々である。

冷泉天皇朝の斎院で、退下後円融天皇の女御となられた尊子内親

王(冷泉皇女
母藤原懷子)、後一条天皇の斎院で、退下後後三条天皇の中宮となられた馨子内親王(後一条皇女
母藤原成子)、白河天皇朝の斎院で、退下後堀河天皇中宮となられた篤子内親王(後三条皇女
母藤原賢子)などである。たゞし、皇后と中宮が併立し、かつ中宮が内親王の例を歴史上でさがすとすれば、馨子内親王の時がそれに当たる。すなわち、後三条天皇には皇后として藤原茂子(公成の女)があり、馨子内親王は中宮であった。『狭衣物語』の作者宣旨は、この馨子親王などの事績を参考にして執筆されたであろうことは以前拙稿で述べているところである(前掲紀要論文)。

おそらく、この「御垣が原」の作者もこのような歴史上の斎院をモデルに考えたものであろう。推定の域を出ないが、狭衣の作者のごとくあるいは、この「御垣が原」の作者も、斎院に仕えた経験がある女房の一人であったかもしれない。当時斎院時代から中宮時代にかけて、一生を内親王に仕えた女房も少なくなかったからである⁵⁾。

30の歌で「をみなへし」(斎院になった兵部卿の姫君)が賀茂神社の垣根に交って咲くようになって私(みかど)のことを忘れないでほしいと「御垣が原のみかど」はいつているが、ここにも『狭衣物語』「みたらし川」の主人公の系譜に連なるものがある。31もそれに答えた前作の女主人公の心と同じである。

32・33は「言はで忍ぶ」の物語中の斎院関係の歌である。小木氏によると皇女と結婚し、後にそれが破局に至った例として、この「いはでしのぶ物語」と「恋路ゆかしき大将」⁶⁾をあげておられる。「恋路ゆかしき大将」は『風葉和歌集』に名がみえないことから文永八年以後の成立とされ、とくにこの「いはでしのぶ物語」の影響を受けたこと明らか作品としておられる(A書817頁)。事実、「恋路ゆかしき大将」にも、皇后宮腹の女一宮が斎宮として伊勢へ下ったことがみえる。

いはでしのぶの関白が最愛の人(前斎院)をなくし、あとに生きる自分はつらく思うのに、その弔問をされないのかと皇后宮にうったえているのが32の歌である。しかし、この皇后宮と前斎院、そして皇后宮と関白の関係が明らかでないので、内容は理解しがたい。33の歌には「見つるや現いまこれや夢 まだ明けぬ夜の心まどひに」という表現があり、「前斎院を生前のままの姿で見たのが現実のことなのか、これは夢であったのか、まだ明けぬ夜の心のまよいで」(樋口氏、C書(下)41頁)と解釈されているが、ここでも『伊勢物語』の在原業平の歌がおもいおこされる。

34・35・36は「秋の夜長しとわぶる」物語の中にみえる斎院関係の歌である。

小木氏は、この物語を詳細に検討され、「女一宮が斎院となり、母君が帝と再会されて、やがて、おそらくは物語の終わりに、皇后の位に昇られたものと考えられる」(A書69頁)とされた。また樋口氏は「帝が主人公の物語であろう」(C書(上)384頁、459の注)とされた。

34では、帝が愛する娘の女一宮が賀茂の斎院にきまったことをその母后が知らずにいるであろうと歌ったものであるが、この詞書や34の歌から想像する限り、斎院(女一宮)のところにも内裏の帝のところにも母后はおられないことになる。そして35の詞書で賀茂の神の御告げにより母后の居所がわかり帝よりお歌がとどき、その返歌をしている(それが35の歌)。帝と母后との仲が変わらないように賀茂の神に祈っていた母后に、その神の効験があったというものである。36は帝に対して私のことをお忘れになっていたのではないかとうらみがましく詠ったものである。したがって、小木氏もいわれるごとく「秋の夜長しとわぶる」日々を送ったというようなことではあるまいか。(A

書71頁) つづけて、小木氏は、右のように別れ別れになった母君と帝をめでたく再会された機縁は、賀茂の御告であり、これらが『狭衣物語』の源氏宮と賀茂大神の件に思い至るとされている。(上同)そして「今

この物語において、神示によって帝が母君の居所を知り、そして失われていた愛が復活して、母后が幸福を得たということは、母君が賀茂に対する信仰心があったから、その加護を得たというだけではない。

すでに人間の男性と同様に考えられている賀茂大神が、その妻たる齋院のために、その母君の幸福を図ったものと考えなければならぬと思う。」とされた。なお、作中人物名に官職名でなく実名をつけているのは、「竹取」「うつぼ」「落窪」のような「源氏」以前の物語に見られるところから、この物語もあるいは、そういう古物語であるかもしれないと云われている(上同)。

37の歌意は、樋口氏によれば、くちなし色(濃い黄色)のこの花は何ともいぬほど美しいと思いますが、それにしてもあなたは、この山吹の花をどのように御覧になりますか―口に出して言わない私の恋慕う気持ちを察し下さい―と、「くちなし」を左大臣が口に出して言わない自分の恋情をいい、(C書(出)255頁)小木氏は、えもいわず美しいけれど「口なし」で何の御返事も下さらないと相手(前齋院)に対して、それでもあなたへの恋はやめませんよといっている(A書745頁)。そして、小木氏は、この「ふくら雀」とは、子雀、寒雀の意であるが、その命名の由来は不明、左大臣と前齋院の恋である(同上)とされ、この「ふくら雀が物語とどうかゝわっているかは明らかでない」(C書(出)255頁)とされた。

尤も史実では、齋院と臣下との恋は後朱雀天皇朝の娟子内親王と源俊房の恋がある(後述)。また齋宮と臣下の恋であれば、雅子内親王と敦

忠、師実というのがあり、師実はのち雅子内親王を室とされた。また、當子内親王と道雅の恋というのもある。これは百人一首に入っている道雅の「今はたゞ思い絶えなんとばかりを人づてならで云ふよしもがな」で示されている如く道雅の悲恋におわった。

このような史実を踏まえて書かれた内容か否かこの37の歌一首からでは明らかにしがたい。たゞ物語のストーリーに、このように前齋院を主人分にもってくるものが作られていたことに今は注目しておく。

38・39は、「忍ぶ草」にみえる齋院関係国歌である。38・39は、主人公の中納言(これを小木氏は主人公の関白の若いころ、中納言のころとされる(A書457・459頁参照))が前齋院の恋を得られなかったやりとりであり、これが源氏と朝顔齋院、狭衣と源氏宮の物語に連なるものであることは云うまでもない。

また忍ぶ草の題名については、小木氏、樋口氏とも『狭衣物語』の「忍ぶ草見るに心は慰まで忘れがたみに漏る涙かな」に影響があるか、この「忍ぶ草」とは忘れ形見の意か(A書460頁、C書(出)74、224頁)とされる。

40は、「かやが下折れ」の関係国歌である。

この「按察の典侍」とは、樋口氏もいわれるように「ありし世の今日のみあれを思ひ出でて神の齋垣もあはれ知るらん」という歌からすれば、当時、みあれの宣旨を勤めていたのかもしれない(C書(下)14頁)。

この書名については、小木氏(A書360頁)、樋口氏(C書(出)304頁)とも『後拾遺集』恋三の藤原惟規の「霧枯れのかやが下折れとにかくに思ひ乱れて過ぐすころかな」によるものとされている。

ただし、この「かやが下折れ」は『風葉集』に十五首の歌が入って

いるだけで他書に見えないので、その成立を小木氏は、『無名草子』以後、『風葉集』以前（A書360頁）とされた。また、この物語には特別のテーマは認められず、嵯峨院と中宮と関白の三角関係の話である（A書367頁）とされた。しかし、按察の典侍が賀茂祭の折「みあれの宣旨」をつとめたときの斎院が本物語にどのようにかかわっているかは明らかでなく、したがって、斎院はこの物語においてあまりウエイトがおかれていたように思われない。

さて、41の「あしたづ」も他書にみられない散逸物語の一つである。書名について、樋口氏は、小木喬氏説をとられ、『古今和歌集』恋一、よみ人知らず「忘らるる時しなれば葦鶴の思ひ乱れて音をのみぞなく」によるか（C書下、25頁647の注）とされている。

41の詞書は、亡くなられた六条院の御忌もあけたので、東宮は宮中へ入られ、前斎院に「のこる木の葉を思ひこそやれ」と歌を贈ってこられた。そこで返歌として41の歌を詠まれた。小木氏は「この御三方の関係は、六条院と前斎院の御子が春宮というのであろう。」（A書112頁）とされる。私も同感である。樋口氏は「残る木の葉を思ひこそやれ」に「梢に残る木の葉のように邸にとどまっておられる母君（前斎院）を、お寂しいことと思いをはせております。」（C書下、25頁）と解釈しておられる。これに対して前斎院は残る木の葉までが散り乱れてゆく心細さを御想像下さいと返歌したのである。

しかし、この物語のように斎院が退下後、後宮に入られて春宮を儲けられたという史実は管見の限り見出しえない。ただし、『源氏物語』のモデルとなった斎宮女御徽子女王は叔父村上天皇の後宮に入り規子内親王を産んでおり、このような史実がヒントになったものであろうか。

42の「初音」の歌は、太政大臣が前斎院におくった歌である。斎院であったときには、かなえられなかった自分の恋も年月を経た今は賀茂の神も許して下さるしめの外の人となられたのだからというもの。

このように前斎院と臣下との恋を史実に照してみると、先述したごとく、後朱雀天皇朝の斎院娟子内親王（後朱雀皇女
母頼子内親王）と源師房の息俊房とのことがある。この恋は、娟子内親王の同母兄後三条天皇には相容れられなかったが、小木氏は、この源俊房と娟子前斎院のロマンスを、物語にしたのがこの「初音物語」ではないかと云われている（A書702頁）。また、この書名について樋口氏は、『源氏物語』「初音」の「年月をまつにひかれて経る人にけふ鶯の初音聞かせよ」（明石の上の歌）のように、鳥の初音を詠み込んだ物語中の歌によるかとされている（C書上、210及び327頁）。

43・44は、「四季物語の中に」と題されたもののうち二首である。「四季物語」は『風葉集』に十九首収められているがこれは、ほととぎすのみかどと葵の斎院の歌である。小木氏もいわれているように「物語とはいふもののこれは特異な作品で、ストーリーを持たないもの」（A書411頁）である。しかしここでも擬人化された「ほととぎすのみかど」と「葵の斎院」の恋が描かれている。「心中ではやはり気にかゝります。逢う日は断念していますが、諸鬘の葵を見ますと」（C書下188頁）というみかど。これに対して斎院の返歌は、「どうしてみかど様は言葉に出して思い出そうとなされるのですか。しめなわの張られた斎院の森の下草のように、私は思いをすべて胸に潜めていますのに」（上同）というもの。帝と斎院という主題は、狭衣物語の系統をひくものであることは一目瞭然である。

おわりに

以上十四種の作り物語にみえる斎王（斎宮・斎院）の国歌四十五首についてみてきたわけであるが、これによってこの十四の物語が、その構成上斎宮・斎院に何らかの関わりを持っていることがわかる。それは換言すれば、王朝時代以来物語を享受してきた人々が斎王というものについて何等かの関心を示していた証左ともなろう。しかし、ここに掲げた物語のみが斎王に関連があるとは断定できない。ちなみに、『風葉和歌集』に七首の国歌を収めている「我が身にたどる」物語（巻四までのみの歌）は、斎王関係国歌を一首も採取することは出来なかったが、この物語には周知のごとく「前斎宮」が、かなりのウエイトを占めて描かれている。また、『風葉和歌集』以後の成立とされる（A書817頁）『恋路ゆかしき大将』でも、女一宮が斎宮となり、後に一品宮と称せられていることがみえる。⁸ このように斎王を扱っているが、一首の斎王関係国歌も掲げていない物語もあるということに注目しておかなければならない。

なお、『源氏物語』以前の『伊勢物語』や『大和物語』など歌物語には斎王が描かれているが、『竹取物語』、『宇津保物語』、『落窪物語』などの作り物語には斎王がとりあげられていないのは不思議と云わねばならない。⁹ 斎宮・斎院が文学作品の中で大きな存在となったのは『源氏物語』とそれにつづく『狭衣物語』からであり、それ以後の作り物語は、これらを継承したものといっても過言ではない。

従来、斎王（斎宮・斎院）は天皇の代理として伊勢神宮・賀茂社に奉仕した「いつき人」であった。従ってその清浄は何人も犯すことの

出来ない存在であった。しかるに、物語の享受者たちは、その皇女たちに人間的な恋愛を与えることに、もろ手をあげて賛成したのである。それが文学作品、とりわけ作り物語において斎王が描かれるようになった大きな要因であると考えられる。

ともあれ、ここに鎌倉時代成立の『風葉和歌集』を中心にその中にみえる作り物語の斎王関係国歌をとりあげ若干の考察を試みた。博雅の御示教をお願いする次第である。

〈補注〉

(1) たとえば、『和歌大辞典』（明治書院、昭和61年）「風葉和歌集」の項（樋口芳麻呂氏執筆）では、「撰者未詳。ただし、序の記載から帰納される撰者像としては藤原為家が最も近い。」とされている。また樋口氏は、この『風葉和歌集』精撰の際、藤原氏や阿仏尼の協力があつたことを推定しておられる。この詳細についてはB書第三章第四節『風葉和歌集』を参照されたい。

(2) その代表的なものをあげると、戸谷三都江氏「斎宮女御の歌」（『学苑』昭和33年1月号所載）、森本元子氏「斎宮女御の生涯」（『武蔵野女子大学紀要』8号所載、昭和46年。のち『私家集と新古今集』所収、明治書院、昭和49年）、山中智恵子氏「斎宮女御御子女王——歌と生涯」（大和事房、昭和51年）などがある。また拙著『源氏物語にみえる斎宮記事の史的考察』（『神道学』第一〇〇号所載、昭和54年）も参照されたい。

(3) 『聖徳学園女子短期大学紀要』第7集所載、昭和56年。

(4) 角田文衛氏「紫野斎院の所在地」（『古代文化』24—8所載、昭和47年）。

(5) 拙著『斎王和歌文学の史的研究』（国書刊行会、平成元年）408頁及び618頁参照。これらによると、後三条天皇朝の斎院祿子内親王の女房「皇后宮美作」の例や後冷泉天皇朝（前半）の斎院祿子内親王の女房「宣旨」など、退下後も仕えている。

(6) 宮田光氏『恋路ゆかしき大将』注解「巻二（一）、（二）、（三）、（四）（東海学園国語国文）25・27・28・29号所載」がある。

(7) 「我が身にたどる姫君」六（『新編国歌大観』第五卷139頁）に「前斎宮」の歌として、¹²⁷おほよどの松にてとしはつもれどもわたのはらからとふ人もなし」とい

うのがみえる。

(8) 宮田氏前掲論文卷二(三)・(四)、『東海学園国語国文』28・29号)参照。

(9) かぐや姫を斎宮と関連づけて論じているものに、藤村潔氏「物語の出で来はじめのおや(下)―竹取物語と源氏物語―」(『藤女子大学紀要』第13号所載、昭和50年)がある。

(平成元年十月三十日受理)